コドモの事情

あさぎ　翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コドモの事情

【Ｎコード】
Ｎ０８５１Ｖ

【作者名】
あさぎ　翠

【あらすじ】
怪盗キッドからの預かり物を盗られてしまった探偵のお話。

1.

カン　カン　カン　カン　カン

ビルの非常階段を利用する足音が夜の街に響く。足音の主は階段を降りきると、裏通りを表通りに向かって歩き出した。既に深夜と言ってもいい時間帯。裏通りには人が一人もおらず、猫が我が物顔で横切ってゆく。表通りの光が届くところまで来ると、彼は眩しそうに目を細めた。

彼の名は江戸川コナン。キッドキラーと呼ばれる事もある彼は、今夜も怪盗を追って夜の街を駆け回っていたのだろう、と言えば聞こえは良いが、その姿はただの小学生である。こんな時間にこのような場所に居ていい訳が無い。コナンは駅へ向かう酔っ払いを避けながら早足で本日の宿泊先である阿笠邸へと向かっていた。残念ながら今日は博士の迎えがない。近頃の激しい寒暖の差で風邪を引いたため、哀に無理やり休まされているのだ。幸い今夜の中継地点は隣の駅の繁華街の外れのビルで、交通機関を利用すると逆に遠回りになるような場所だったため、コナンはこうして一生懸命歩いているのだが。

「スケボーの充電、もっとしっかりやっておけば良かった・・・」

今はただの荷物と成り果てているスケートボードを左脇に両手で抱えつつ、同じくジャケットの左ポケットに入っている時価数億円の存在を確かめる。はっきり言って、重いし、眠いし、メンドクサイ。それぞれ別のモノに掛かる言葉だが、原因は概ね自分自身だ。コナンは大きな溜息をついて自身に呆れつつ歩を早めた。

「ボク、どうしたんだい？」

ヤバイ、お巡りか！と思い声がした方を向けば、眼鏡を掛けたスーツ姿の男性が心配そうな顔でコナンの顔を覗き込んできた。

「ご両親と一緒なのかい？」

「えっと、うん。今コンビニで買い物してる」

側にあるコンビニの光が目に入り、とっさについた嘘だった。ここでお巡りを呼ばれては面倒だ。

「ウソだな。俺は今そこの店を出てきて君が一人で目の前を通り過ぎるのを見てたんだよ。本当の事を言いなさい」

なんて事だ。最初っからパレてるではないか。しかもその場しのぎとは言え、なんてお粗末なウソを。

「ごめんなさい、僕一人です。でも、これから家に帰るところだから大丈夫」

「大丈夫って時間じゃないだろう。家はどこ？」

「べ、米花町」

「そんな所から来たのか！子供の足だと結構遠いだろう。よし、じゃあ俺が近くまで送っていく」

「えっ！いいよ、僕一人で帰れるし」

「だ・め・だ。子供がうろつく時間じゃない。誰かに襲われでもしたらどうするんだ」

コナンは、あんたが不審者じゃない証拠はどこにあんだよ、と思ったが、相手の目があまりにも真剣だったため口にすることは出来なかった。

男と歩いて１０分程経ち住宅街へと差し掛かった。辺りは薄暗く樹木の多い公園もあり、襲うには絶好の場所だ。コナンは逃げ込める所を探しながら男への警戒を強めた。

「なあ、頼むからそんなに警戒しないでくれよ」
「どうして？だっておじさんが言ったんだよ『誰かに襲われたらどうする』って」
「おじ・・・、まあいいや。俺なぁ、こう見えても子供たちに空手を教えてて結構人気あるんだぞ？だからあんまり警戒されるとヘコむ」
「そうなんだ。ふーん。何かの武術やってるとは思ってたけど。へぇー」
「あ、信用して無いな。ほらこれ、名刺」

男は名刺入れの中から一枚取り出し、漢字読めるか？と言いながらコナンに渡した。
名刺には有名な空手道団体名と所属道場名に住所、電話番号、そして氏名が印字されていた。

「高橋尚司さん。凄いね、七段なんだ」
「そうだ。明日は一日道場にいるから、良かったら見学においで。ただし保護者と一緒にな」
コナンは乾いた笑みを返して名刺をズボンのポケットにしまった。
「あれ？高橋じゃないか」

コナンと高橋は反射的に声のした方へ顔を向けた。背の高い男がこちらに向かって手を上げている。

「渡辺さん？」

「何やってんだこんな所で。終電逃すぞ？」

「いや、実は・・・」

高橋はこれまでの経緯を話し、米花町までこの少年を送っていくのだと説明した。

渡辺と呼ばれた男はしゃがみ込んで、じっとコナンの顔を見ていた。そして、ああ、と一声あげるとにっこりと笑う。

「それで怪盗キッドは捕まえたのかい？キッドキラーの少年」

「そう簡単にはいかないよ」

コナンは内心冷や汗をかいていた。自分がキッドからの預かり物を持っていると知られてはならないからだ。

「今回はこの辺に現れるかなぁって思って待ってたんだけど、全然来なかったんだ。僕の予想ハズレちゃったみたい。ところで、おじさん誰？」

「おじ・・・」

おじさんと言われて絶句する渡辺の代わりに高橋が笑いながら答える。

「彼は俺の空手の先輩でね、渡辺さんって言うんだ。ちなみに俺も渡辺さんもまだおじさんとは呼ばれたくない年頃だ」

「ふーん」

「それはそうと高橋、お前本当に終電なくなるぞ。この少年は俺が米花町まで送るから、お前は帰れ」
「いや・・・でも・・・」
「お前今月ピンチなんだろ？タクシー代、出せるのか？」
「うっ。それを言われると・・・。じゃあ、すみませんがお願いします。じゃあな、少年。今度遊びに来いな！」
「おやすみなさーい。どうもありがとう！」

高橋は腕時計を確認し、駅へ向かって走り出した。

「よし、じゃあ、俺達も行くか」
「うん」

コナンは再び警戒しつつ歩きだした。
会話の一つもなく、ただ黙々と歩く。バス通りに沿って細長く増設された公園も次第に終わりが見えてきた。その先にあるスーパーの前の大通りを渡れば、とりあえず米花町に入る。そこまでの辛抱だ。

「少年、すまん。ちょっとトイレによってもいいか？」

渡辺が指差した先には公園の終わりにある四角いたてもの。通りに面しており街灯の光も届いている。

「うん、いいよ。僕、入り口で待ってるね」

コナンは渡辺がトイレに入るのを見届け、見張るように入り口の前に立つ。
少しして渡辺が出てきた。

「やぁ、すまなかったな。少年」
「トイレは仕方ないよ」
そう言ってコナンが先に立って歩き出すと、突然良く分からない衝撃が走り、目の前が真っ暗になった。

2.

あまりの寒さに目が覚めた。
視界に広がるのは一面の緑と、そこから流れ落ちる雫。
ここはどこだろうと考えているうちに、ふと白い姿が頭を過ぎった。コナンはハッとし、ガバリと起き上がる。

「いってぇ」

左の首の付け根辺りが酷く痛んだ。右手で押さえながら痛みの波が引くのを待つ。そうだ、ヤツに会った帰りに高橋に見咎められ送られる事になり、途中で渡辺と会って今度は渡辺に送られる事になった。しばらくすると渡辺がトイレへ行くと言い出し、用が済んで歩き出した時に目の前が真っ暗になった。確か渡辺も空手をやってるという話だったから、首筋に手刀を入れられたのだろう。
痛みが引いてきたところで所持品の確認をする。
携帯は2台、財布、名刺。やはりと言うべきか、ビッグジュエルは無くなっていた。最初からそれが狙いで高橋を帰したに違いない。

「チクショ。なんであの時、気を抜いちまったんだ」

トイレから出たあの時、渡辺に背中を見せてしまったが為にこんな事になってしまった。
何が何でも取り返してやる！
まずは高橋の所へ行き、渡辺に住所を聞き出さなくてはならない。
現在時刻は6時を過ぎたところ。空手の道場が開くのは、早くても9時位か。まだ暫らく時間がある。

「っくしゅん」

コナンは一つくしゃみをした。
そういえば衣服がしっとりと湿っており、葉にも沢山の水滴がついている。もしかすると明け方霧雨が降ったのかもしれない。とりあえず自販機でホットドリンクを購入して少しでも体を温めようと思い立ち上がる。この季節にホットがあればいいのだが。コナンは期待を込めて自販機目指して歩きだした。

□　□　□

灰原哀の休日の朝は少し遅い。昨夜も遅くまで研究に没頭し、空が白み始めた頃就寝した。

「もう9時。起きなくっちゃね」

哀は身支度を整えてリビングへ向かった。

「おはよう、博士。調子はどう？」
「おお哀君、おはよう。お陰でばっちりじゃよ」
「そう。良かったわ」

哀はコーヒーを入れるために、キッチンに立つ。

「そういえば工藤君は？まだ起きてこないの？」

「今朝はまだ見とらんのぉ。どれ、起こしてくるか」
「いいわ。私が起こしてくるから」
哀は食パンをトースターに入れコナンの部屋へ向かう。トーストが出来る前に起きてくれればいいんだけど、と思いながらドアをノックした。
「工藤君、もう9時よ。起きなさい」
返事が無い。それどころか気配を感じられない。
「工藤くん？入るわよ」
ガチャ
そこにはコナンの荷物とシワの無いベッドがあるだけだった。

「博士、大変よ！」
血相を変えてリビングへ降りた来た哀に博士は驚いた。
「どうしたんじゃ」
「工藤君が居ないのよ」
「なにっ、新一が！トイレに行っとるんじゃないのか？」
「いなかったわ。それどころかベッドを使った形跡もないのよ」

「ははーん。さては徹夜して目覚ましに散歩へ行ったんじゃな」
「そんな訳ないじゃない。もう9時半よ。まさか、昨夜あのまま帰って来なかったんじゃ・・・」
「とりあえず新一の携帯に電話してみよう」

博士は携帯を取り出しコナンの番号へ電話する。
『お客様のお掛けになった電話番号は、現在・・・・』
再び新一の番号にも掛けるが同じメッセージが流れるだけだった。

「そうじゃ。毛利君の所へ掛けてみよう」

博士は三度電話を掛けるが相手が出る様子は無かった。

「留守電じゃ」
「折り返してもらうように入れておきましょう。何も無ければ誤魔化せばいいんだし」
「そうじゃの・・・・・・・・阿笠じゃ、すまんが――――」

コナンにも毛利家の人間にも連絡がつかない事が哀を不安にさせる。
まさか、ヤツ等の手に・・・
いや、小五郎は仕事かマージャンか下のポアロあたりに、蘭は部活か友人と遊びに出かけているだけなのかもしれない。ただ、コナンに何かあったことだけは確かだろう。

「何をやってるのよ、工藤君。連絡くらい、ちゃんとよこしなさいよ」

哀は不安と焦りを小さな声で吐き出す。
焼きあがったトーストが忘れられたまま冷たくかたくなっていっ

た。

□　□　□

高橋が所属している道場は三つ離れた駅のすぐ側にあった。
道場の受付で高橋への面会を求めると、１１時に来る事になっていると言われ、仕方なく外で時間をつぶす事にする。コナンが、今日は一日居るって言ってたじゃねーか、とブツブツ言いながら歩いていると、少し大きな本屋を見つけた。迷い無くそこへ入り新刊チェックを始める。ゆっくり見ていれば1時間くらいあっという間だ。時計を確認して再び道場へ向かったが、まだ高橋は来ていなかった。今度は側の応接セットで待つようにと指示され、コナンはありがたく待たせてもらうことにした。手持ち無沙汰になり新聞でも読もうかと思った頃、キィと扉が開く音がした。

「高橋さん。お客様がお見えですよ」

悪戯っぽい受付のお姉さんの声に顔を上げると高橋と目が合った。

「おはようございます、高橋さん。昨日はどうもありがとう！」

コナンはとっておきのコドモの笑顔で挨拶した。

「え？あっ、君は昨夜の。今日は保護者の方と一緒だろうね」

高橋は周りを見回すがそれらしき人は居ない。

「それがね、僕今日は見学に来たんじゃないんだ。実はお願いがあって。聞いてもらえたらすぐに帰るよ。耳かして・・・・・・・・だからお願い。ナイショにしておいて」

コナンは高橋に、お礼の手紙を書きたい、と耳打ちした。両手を合わせてお願いのポーズをとるが、高橋は腕を組んで渋い顔をしている。多分個人情報の漏洩について考えているのだろう。コナンはダメ押しに「ね？」と小首を傾げれは、まあいいだろう、と了承してくれた。コナンが一瞬ニヤリと笑ったことなど言うまでも無い。

こうして第一ミッションである渡辺の住所入手は終了した。

3.

毛利小五郎は朝から競馬新聞と携帯ラジオを持って、ポアロでコーヒーを飲んでいた。家を出る時に電話が鳴っていたが、きっと大した用ではあるまい。急ぎの用であれば携帯が鳴るだろう。小五郎の心はこの時すでに馬番と配当金の事でいっぱいだった。

ポアロに来てどのくらいだろうか。三杯目のコーヒーを飲み干してお替わりを貰おうとしたら店内が混雑している事に気がついた。時計を見れば間もなく１１時半。蘭が昼食を作るために帰って来る時間だ。そろそろ家に戻るか、と小五郎は重い腰を上げた。

家に帰れば蘭はすでに帰宅しており、台所に立っていた。

「あ、お父さん。すぐに出来るからね」

「そう言ってお前はまたすぐに遊びに出掛けるんだろうが」

「いいじゃない、たまには」

蘭は鼻歌混じりに料理を再開する。

小五郎はリビングに向かうと留守番電話が点滅している事に気がついた。

ああ、今朝のアレか、と小五郎は留守番電話を再生する。

留守番電話の内容は阿笠博士から折り返し電話が欲しいというものだった。

「あー、毛利ですが。どうかしましたか、博士。コナンのヤツが何かしでかしましたか？」

小五郎は博士が言いずらそうにしているのを、イライラしながら待っていた。

「何ですと！コナンがいない？何でまた」

昨夜コナンは、博士の新作のゲームをやる為に泊まりに行ったはずである。

「わかりました、私の方でも探してみます。・・・え？蘭は今メシ作ってますよ。じゃあ、また後ほど連絡します」

小五郎は静かに受話器を置いたが、その手は怒りに震えていた。あンのクソガキ！そんな事のために阿笠博士の家に泊まりに行ってやがったのか！イタズラってぇのは、見つからずにやり遂げてこそホンモノなんだってぇ事を分かってんのか！！

論点がややズレているが、それは小五郎なりの心配の仕方なのだ。

「お父さん、今コナン君がいないって聞こえたけど・・・」

蘭は出来上がった焼きそばの皿を小五郎の前に置き、自分も席に着く。

「ああ、昨夜怪盗キッドを捕まえに出かけたらしくて、まだ帰って無いんだとよ。俺もメシ食ったら探しに出かけてくるから、おまえは・・・・」

「ちょっ、ちょっと待ってよ。博士は？博士は何で止めてくれなかったの？」

「博士はカゼ気味で早くに休んだそうだ。連れて行けないから諦めるようには言ったらしい」

蘭は、顎に手を当て考えながら、ふと、思いついたことを口にした。

「ねぇ、お父さん。目暮警部に頼んでキッドの担当の警部さんにコナン君が来なかったか聞く事って出来ないかな？もしかしたらキッドに攫われたかも・・・。あ、そうしたら予告状とかも警察に届いているかもしれないよ。だってキッドって予告なしじゃあ犯行はしないんだし。いくら人を傷つけないって言ったって、やっぱり犯罪者は信用できないわ・・・。そうよ、善は急げよ。急いで目暮警部に電話して！」
「あ？ああ・・・」
「ほら！早く」

小五郎は蘭に丸め込まれ、目暮に電話する事になった。

□　□　□

もうすぐ昼休みという頃、捜査一課の外線が鳴り響いた。ワンコールで高木が受話器をとる。電話を受けるのは若い者の義務だ。高木は二・三言話をすると、すぐに保留ボタンを押す。

「目暮警部、1番に毛利さんからです」

目暮は少しイヤそうな顔をして受話器を上げた。この男からはロクな電話が掛かって来ない。

「はい、目暮。・・・ああ、元気だよ。この間会ったばかりじゃな

いか。で、どうしたんだ。まさかまた殺人事件じゃないだろうな。・・・なにっ、コナン君が！・・・・・・ああ、分かった。二課には当たっておこう。それよりも君は事の重大性に気がついているのか？君が今までに解決してきた事件の被疑者なり関係者なりが、コナン君を誘拐したかも知れないという可能性を考えているのかと言っているんだ。はっきり言ってキッドの方がマシかも知れんぞ」

目暮の電話の内容に、捜査一課は静まり返った。そして指示を仰ぐ為に目暮の周りに集まる。

「・・・いや、捜査はこちらに任せて、君は自宅に居たまえ。何事もなくコナン君が帰宅した時に、誰かが家に居なくてどうする。・・・ああ、分かった。任せておけ」

目暮は険しい顔で受話器を置いた。

「目暮警部」

高木が指示を求める声で目暮を呼ぶ。

「コナン君が行方不明になった。昨夜未明に、怪盗キッドを捕まえる為阿笠邸を出て、今朝の9時過ぎにまだ帰宅していない事が判明している。事故、事件、誘拐、キッドによる犯行を視野に入れて操作を行ってくれ。佐藤君、高木君。二課の中森君の所へ行って、コナン君らしき子供が来ていなかったか確認を取ってもらってくれ。それとまさかとは思うが、キッドからコナン君を預かっているというような連絡が来ていないか、それから念の為、昨夜の犯行の予告状も貰ってきてくれ」

「はい」

機敏に動く部下達を頼もしく思いながらも、目暮は杞憂であって欲しいと願わずにはいられなかった。

□　□　□

コナンは高橋と分かれた後、先程見つけた本屋へ行き地図を探した。渡辺の自宅を探すためだ。一般的な道路地図で渡辺の自宅周辺は1万分の1の表示のものしかなかったが、大体の位置はつかめた。というのも、昨夜のキッドの中継地点から然程離れていなかったからだ。要するに米花町近辺なのだ。あとは近くまで行って自宅マンションを見つければいいだけだ。

コナンは米花町の隣の駅まで戻ると、早速渡辺の家を探した。

駅から徒歩20分。多少入り組んだ住宅街にその建物はあった。

「リバーサイドマンションって、川なんかどこにも無ぇじゃねぇか」

言いながら周囲を見回した先に『横河荘』の文字が見えた。きっと同じオーナーなのだろう。安易さに力が抜ける。

コナンは気を取り直してマンションへ入っていった。

「ここか」

何の躊躇いもなく渡辺の部屋のインターフォンを鳴らした。だが、留守のようだ。鍵もしっかり掛かっている。在宅であればサッカーボールで渡辺を倒して宝石を取り返せたのだが、と思ったところで

我に返った。それではただの押し込み強盗だ。そもそもあるはずのない物を取られたところで、盗まれたものはないと言い張れる。実際にこの部屋に保管していなければ尚更だ。さらに渡辺はコナンをキッドキラーだと知っていたし、サッカーボールを使用すれば近所が不審に思い顔を出すくらいの音がする。

何をやっているんだ、俺は。このままでは宝石が闇に流されてしまう。その前になんとか阻止しなければ。

コナンはイマイチ回転の悪い頭と疲れた体に休息の必要性を感じ、近くに見える公園に向かった。

「そう言えばこの公園・・・」

バス通りに沿って造られた細長い公園。一丁先には見覚えのある四角い建物。

コナンはベンチに深く腰掛け、大きな溜息をついた。

「やってくれるぜ、まったく」

その時、後ろから伸びてきた手がコナンの目を覆った。

4.

突然塞がれた視界にコナンは体を強張らせた。
誰だ！渡辺に見つかったのか！？
後ろを振り向こうにも、両手でしっかり頭を固定されていて確認できない。しかもベンチの背もたれが邪魔で反撃する事すらできない。

「だ～れだ」

気の抜けた声と共に一瞬だけ放たれる澄んだ気配。分からないはずがない。今、最も会いたくない人物だ。

「はぁ・・・」

コナンは思いっきり気が抜けてベンチをズリズリと滑った。

「何だよ、名探偵。張り合いねぇなあ」
「うっせぇよ。なんでオメェがこんな所にいんだよ」
「探したからに決まってんだろ。それより話は後だ。ちょっと立て」

ああ？何だよ一体、と文句を言いつつ立ち上がったコナンの頭の上に大きな布が被せられた。

「何する気だ！」
「いいから暴れない。ワン・ツー・スリー！はい、出来上がり」

合図とともに布が外されるとコナンの服装が変化していた。いつものジャケットと短パンではなく、ポロシャツとGパン姿に、そし

て眼鏡が無くなっていた。

「俺の服はどうした？」

「大丈夫、このリュックに入ってるよ。子供用のな」

怪盗は荷物の入ったリュックを持ち上げて見せるが、コナンは何故かこちらを向かない。

「なんだよ。いい加減こっち向けよ」

「お前、いくらなんでも昼間っからあんな酔狂な格好はしてねぇだろ？ちゃんと変装してるんだろうな」

後ろから気配を消して現れ、自分に目隠しをした怪盗は、もしかすると素顔なのかもしれない。宝石を盗られた後ろめたさも手伝って、コナンは頑なに怪盗の姿を見ようとはしなかった。

怪盗はあまりにも律儀なコナンの反応に少し楽しくなり、両肩を掴むと無理やりこちらを振り向かせた。

「いいからこっち向けって！」

「いてっ！」

左肩を押さえてしゃがみ込むコナン。息を詰めて痛みをやり過ごそうとしている。

「怪我してたのか。見せてみろ」

「いい・・・。別に、大した事ねぇ」

「それは俺が判断する」

怪盗の真剣な声にコナンは渋々痛む肩を見せた。

肩の首に近い部分が、斜めに青く内出血し、周囲が赤く腫れてい

る。

「殴られたのか？」

怪盗の問いにコナンは黙って頷いた。

怪盗は何処からともなく湿布を取り出し、そっとコナンの肩に貼る。

「何でも持ってんだなあ」

コナンは呆れた声で言った。

「さて、自己紹介だ」

怪盗はコナンをベンチに座らせると、自分もその隣に腰掛ける。

「この顔の名前は黒羽快斗。フツーの高校生だ。俺が今ここに居る訳は、捜査二課を盗聴していたときに、怪盗キッドが少年を誘拐したかも知れないという情報を得たからだ」

「誰を誘拐したんだよ」

「お前だよ、名探偵」

「はあ？！」

「お前さぁ、自分の立場分かってるか？江戸川コナンは事件または事故に巻き込まれたか、毛利小五郎を恨む者による誘拐か、または怪盗キッドの現場から帰らない事からキッドによる犯行とも言われてるんだぞ？」

「な、なんで？」

「ちゃんと、家か誰かに連絡したか？」

「ヤベッ！」

「阿笠博士からは、何度も電話しているらしいぞ」

「でも携帯は一度も鳴って・・・って、まさか！」

コナンは携帯を取り出して開くが液晶画面は真っ暗のままだった。しかも二台とも。慌てて電源を入れようとした指が途中で止まる。今、この電源を入れれば、携帯の電波情報が電話会社に送られて見つけられてしまうかもしれない。まだ自分にはやらなければならない事があるのだ。

「連絡しないのか？」
「後でするさ。で？」
「心配した阿笠博士が毛利探偵に連絡し、そこから捜査一課の警部さんに連絡が行ってる。現在、捜査一課が総出でお前を探してるって訳だ」
「そっか・・・」
「だから、とりあえず帰れ」
「ダメだ」

コナンは一点を見つめ堅い声で否定した。

「じゃあ、お前の言い訳を聞こうか」

怪盗は両肘を膝につき、コナンの顔を覗き込む。

「俺は、本当は、お前に合わせる顔がない」
「？」
「・・・石を盗られた」
「なにぃっ！・・・いや、悪い。続けてくれ」
「犯人も家も分かっているが、今は不在だ。帰ってきたら俺がケリをつける」
「その怪我も犯人にやられたんだな」

「ああ。そのまま朝まで野宿だ」
コナンは自嘲気味に語る。
「なあ、石の事は俺に任せて、お前は帰るって選択肢は？」
「ない」
「だよな。そう言うと思ったよ。なら予定を変更しよう」
「あ？」
「まずは犯人の家に行って石を取ってくる。石が無ければ、メシ食って犯人の帰宅を待ってから犯人をシメ上げにに行く。オーケー？」
「メシはどうでも良いけどよ、家に侵入できるならやってるって。できねぇから待ってるんじゃねぇか」
「チッチッチ。メシは大事だぞ。オメーの事だから、ロクにメシも食ってねぇんだろ。それから宝石奪還には俺も行くから大丈夫。半分は俺の責任みたいなものだからな」

いやぁ、お前の事だから、何か理由があるとは思ってたけど、俺の古着持ってきて正解だったな。最初は警察への目くらましのつもりだったけど。ほら、話してる間に見つかって『誘拐犯だ！』なんて言われたら目も当てられないだろ？俺のこの顔なら兄弟で通るだろうし。あ、お前、人見知りする内気な弟役な？出来るよな、そのくらい。で、これ、俺とお揃いの帽子な？
怪盗はそう言いながら黒いキャップをコナンの頭に被せる。
コナンがよく回る口だと呆然としていると、怪盗は勢いよく立ち上がった。
「ほら、行くぞ。新一」
「よりによって、新一かよ！」
「じゃあ、シン？」
「まんまじゃねぇか」

「なら、他に直ぐに反応できる名前あるか？」

怪盗が手を差し出す。

コナンは、苦虫を噛み潰したような顔で、その手につかまり歩き出した。

5.

コナンの姿を最初に見かけたのは、彼が公園に入って来た時だった。周囲に怪しい人影もなく、大きな怪我をしている様子もなかったので一先ず安心したが、いつもより元気がないように感じ、ここは一つ驚かしてやろうと後ろからこっそり忍び寄ったのだ。だが、やはり元気がないし、顔色もあまり良くない。話を聞いてみれば、多少落ち込んでいる理由は分かったが、いつものコナンならば失敗すらも力に変えて、二倍三倍の闘争心を燃やしているはずである。やはり話の中にあった野宿が影響しているのかも知れない。今朝外を見たときに路面が濡れていたから、夜中から朝にかけて雨が降っていた事は間違いないだろう。しかも昼間は汗ばむこの季節でも、明け方はまだ冷える。濡れた衣服を着て寒い所で寝ていれば風邪を引かないわけが無い。

自分の体調不良に気付いてないんだろうな、この探偵君は。

怪盗は思いのほか大人しく手を引かれているコナンを横目で眺める。何処を見ているのか分からない顔をしていたコナンだが、怪盗の視線に気がつくと、鋭い目で睨み返した。

とりあえずは大丈夫そうだ。遅いかも知れないが、念の為、食後に風邪薬を飲ませておこうと思う怪盗だった。

□　□　□

「へぇ～。ここがリバーサイドマンションね。川は？」

自分と同じ反応をした怪盗に、コナンは「あれだよ」とふるいアパートの横河荘を指差した。それに対し「あっそ・・・」と気の抜けた返事が返ってくる。コナンは乾いた笑いをこぼした。

「さぁ、気を取り直してさっさと片付けっちまおうぜ」

怪盗はコナンの手を引きマンション内に入って行く。目的の部屋の前でインターフォンを鳴らすが、やはり不在のようだ。在宅であれば一石二鳥だったのだが残念だ。怪盗はポケットから何かを取り出し、鍵を使って開錠するのと同じ所作とスピードでドアを開いた。そして急いで部屋に入り鍵を掛ける。人の気配は無い。二人は真っ直ぐ奥の正面の部屋に入った。

「随分いい部屋だなあ」

「何か悪い事でもしてんじゃねぇの？」

「オメェに言われたくないと思うぞ？」

間取りは２ＬＤＫ。左側にカウンター付きのキッチンと１０畳ほどのリビング、右側は和室のようだが、フローリングカーペットを敷いてベッドを置いており、寝室として利用しているのだと思われる。そして玄関のすぐ横にも部屋らしきドアがあった。

「よし。じゃあ、名探偵はここを調べてくれ。俺は向こうの部屋を見てくる。いいか、痕跡は残すなよ」

「へいへい」

コナンは、家宅侵入罪だな、と呟きつつハンカチを探してポケッ

トに入っていない事に気付いた。先程怪盗によって着替えさせられてからポケットに何も入れてい。いや、それ以前に、昨夜宝石を包むのに使用し、そのまま渡辺に持っていかれたのだからあるはずが無い。コナンは少し迷ったが、怪盗に全て任せる事にした。

「おい、名探偵。こっち来て見ろ。ちょっと凄いぞ」

呼ばれて出向いたコナンは、その部屋の様子に驚いた。
スチールラックに並べられているブランドバック、ポーチ、財布の数々。そして一定の基準に満たなかったと思われる物が、無造作に段ボール箱の中に入れられている。中にはブランド品以外の実用品もあり、盗品である事が一目瞭然だった。

「こっちにはオレオレサギの台本が何冊かあるぜ？コイツ、相当ヤバイ奴なんじゃねぇか？」
「ああ、そうみてぇだな。友人の高橋さんが気の毒だぜ」

トゥルルルルルル・・・・・・

突然鳴り出した電話の音に、心臓がドキリとした。６コール目で留守番電話に切り替わる。機械的な女性の声の後、男がメッセージを入れる。

『加藤です。携帯に連絡したんですが、繋がらないようなのでこちらにメッセージ残します。例の石の引き取り、少し遅れます。と言っても、約束の１８時を少し過ぎる程度ですが。よろしくお願いします』

ツー、ツー、ツー

コナンと怪盗が顔を見合わせる。コナンの口元がニヤリとした。

「悪い顔してんなぁ、名探偵。どうする気だ？」

「んなの決まってんじゃねぇか。待ち伏せして一網打尽だ」

「じゃあ、この石はエサとして置いとくか」

「おう、頼む。絶対捕まえて、後悔させてやる」

「どっちが悪党だか分かんねぇ台詞だな、オイ」

「ウッセーよ」

コナンはバツが悪そうに怪盗から顔を背けた。そして軽く咳き込む。少しずつ風邪の症状が出てきているようだ。

怪盗は一瞬顔をしかめると、長居は無用と言い放ち、渡辺のマンションを後にした。

「よーし、そうと決まれば、メシだ、メシ！！腹減ったー！」

怪盗は意気揚々と歩き出す。

コナンは、白い姿の怪盗とのギャップに少々頭痛を覚えるのだった。

6.

阿笠邸では、遅めの昼食を済ませた哀が後片付けをしていた。コナンからは未だに連絡はないし、こちらか電話をしても繋がらない。先ほどあの迷探偵から連絡が来たときは、まさかそこまで大騒ぎになっているとは思わず、物凄く驚いた。事故、事件、誘拐。まず『キッドによる誘拐』はないだろう。だいたいメリットがない。『事故』こればかりは運だ。どんなに気をつけていても、遭うときには遭ってしまう。『キッド以外の人物による誘拐』これは無いとは言い切れないが、不審人物に気付けないほど彼は愚かではないはずだ。そして『事件』。これが一番ありえる。黙っていても呼び込む体質の癖に、事件と聞いては黙っていられず自分から飛び込んでいく。それは手の施しようの無い病のようなものだ。だが、本当にそれらであれば哀はさほど心配しない。問題は、組織絡みであったら、という事だ。万が一にもコナンが組織の人間を見つけ、迂闊にも近づいて拘束され最悪の事態になっていたらと思うと、気が気ではない。そう考えるだけでも体が震えるのが分かる。

そんな時だ。家の電話が鳴ったのは。

突然の音に哀は心底驚いたが、手を拭いて受話器を取る。

「はい、阿笠です」

『あ、灰原か？』

「・・・工藤君なの？！ちょっと、あなた、一体何を考えているのよ！」

『悪い、マジで悪かったって。確かに俺も連絡すんの忘れてたけどさ、犯人に携帯の電源切られてるなんて思わなくって』

「また、事件なのね」

『事件っつーか、キッドから預かってた石、盗まれちまって』

「・・・なんだか、もう、返す言葉も無いわ。ところで工藤君、鼻

声みたいだけど気が付いている？」
『ん？ああ、今ファミレスにいるんだけどよぉ、キッドのヤローに飯食わされて風邪薬まで飲まされた。薬飲むほどじゃねぇってのに』
「えっ？キッドって、怪盗キッドと一緒なの？」
『おう。見つかっちまった。これからヤツと一緒に石を取り返してくる』
「まったく。あなた達って何て非常識な関係なのかしら。探偵が怪盗に見つけられて、世話焼かれるなんて前代身門よ」
『・・・・・・』
「まあいいわ。ってことは自分の事、何て騒がれているか分かってるわね」
『ああ、事故か事件か誘拐ってヤツだろ？だから逆探知されるかも知んねぇ探偵事務所じゃなくてこっちに電話したんだ。まあ、石取り返して犯人ふん縛ったら帰るから、おっちゃんへの連絡は頼んだぜ』
「ちょ、ちょっと、待ちなさいよ。何て言えっていうのよ」
『そこは、まあ、適当に頼む。じゃあな！』

ツー、ツーという無機質な音が耳に届き、哀の受話器を持つ手が震える。無責任にも面倒事を押し付けてさっさと電話を切ったのだ。

「テキトーでいいのね？」

コナンが言った適当とは明らかに違うニュアンスの同じ言葉を呟くと、哀は小五郎へ電話をするため探偵事務所の番号を押し始めた。

□　□　□

小五郎はたった今かかってきた電話について、とりあえず整理してみる事にした。
電話の相手は灰原哀という阿笠博士が面倒を見ている子供だ。普段は澄ました顔して可愛げの無い口を利いているが、所詮は小学生。事の重大さにビビッて話の順序がメチャクチャだ。結局、ガキはガキということだ。
まず、相手は小学一年生だ。聞き違いや言い間違い、希望的な思い込みなどを考慮して考えなければならない。
最初は『キッドに見つかった』だ。これはつまり、捕まったのだ。そう、見つけて放っておくはずがない。
そして『宝石を盗まれた』。これはそのままの意味だろう。実際にキッドは予告通りビッグジュエルを盗んで行った。
それから『見つかるまで・・・』いや『見つかるから帰れない』だったか？これは要するに逃げ出そうにも監視の目が厳しくて帰れないのだろう。
最後は『一緒に探す』か。これは我々にも一緒にビッグジュエルを探して欲しいというコナンからの要望にほかならいない。きっとそこにはコナンも居るはずだ。
そして全文を補完して繋げると、『怪盗キッドを捕まえに出掛けたコナンは、逆にキッドに捕まりビッグジュエルを盗られてしまった。そして逃げ出そうにも監視の目もあり外に出る事ができない。一緒にビッグジュエルを探し、自分も救出してくれ』。
やはり犯人は怪盗キッドだったのだ。そうと決まれば急いで目暮に連絡しなければならない。

小五郎は自信満々に、再び捜査一課へ電話した。

7.

佐藤と高木は二課から戻り、現在判明している分だけの報告と予告状のコピーを目暮に渡すと、自席へ戻り昼食を摂った。現場でコナンを見たものが居るかどうかの確認は、警備に出ていた警官の数が多すぎるため時間が掛かる。その為、確認が取れ次第、二課から電話を貰える事になっていた。

食後、ただ電話を待っているだけというのは辛い。

高木は自分用にコピーしていた予告状を眺めていた。今回の暗号はそれ程難しくなかったようで、答えが解ってしまっている今となっては解説されるまでも無い。

だが、しかし。

「なんか、ちょっと、おかしくないか？」

今回の犯行現場と日時を示しただけにしては、文章が少し長い気がする。

「どうしたの？高木君」

となりの席の佐藤が、高木の手元を覗き込んできた。今まで別の書類仕事をしていたのだが、高木の声に興味を引かれたのである。

「ああ、キッドの暗号を見てたの。それの何処がおかしいの？」

高木は、考えすぎかもしれないですけど、と前置きをしてコピーの余白部分に今回の犯行の時間、場所、宝石の名前を書き出した。

「えっとですね、ここからここまでが時間。ここからここまでが場

所。そしてこれが宝石の名前になりますよね。そうするとこの部分がどうしても余るんです。そのままの意味でも問題ないかもしれないんですけど、もしかしたら・・・」
「ここに別の何かが隠されている？」
「ええ」

佐藤と高木の二人は予告状の写しをジッと見つめた。その言葉に与えられた意味は何か。自分の頭の中にヒットするものはない。あの子供はここらか何を読み取ったのだろうか、と別の方向へ思考が向かう。
佐藤は溜息を付き、考える事を放棄した。

「考えたってダメなものはダメね。私は文明の利器に頼るわ」

そう言って佐藤は自席へ戻った。
軽快な音を立ててパスワードが解除される。

「そうか、パソコン」

高木も佐藤に倣い、パスワードを解除する。
ブラウザを立ち上げキーワードを検索。気になるものを片っ端から新しいウィンドウで開いていった。ある程度の記事を開いたところで、必要なものを絞り込んでいく。何度も同じ作業を繰り返しているうちに、あっという間に時間が過ぎていった。
二課から電話があった。コナンの姿を見たものは居ないということだ。そのことを目暮に伝え、もう少し調べようと席に戻ると佐藤が近寄ってきた。

「どう？何かわかった？」

佐藤がニヤリと笑う。解読に一歩近付いているのかもしれない。
「僕が見つけたのはこんなもんです」
高木は自分のＰＣのディスプレイを佐藤に向け、数枚の記事を見せる。そのどれもが専門分野に関する内容で、佐藤は読むのを諦めた。
「高木君ってもしかして理系？こんな難しいの理解する自信ないわ」
「理系かどうか分からないですけど、割と好きですね」
「私のはこれ。今回の暗号って、比較的解きやすかったでしょ。だから難しく考えなかったの」
佐藤は高木に見えやすいようにディスプレイの向きをを変えた。
「さ、佐藤さん、これ・・・」
「ふふ～ん、しかも該当箇所はなんと米花町の隣よ」
「佐藤さん、これ、きっと、当たりです」
そのとき再び電話が鳴った。殆どの人間が出払っているせいか、音が大きく感じられる。電話を取ろうとする高木を制して佐藤が受話器を上げた。高木は佐藤の声を聞きながら地図サイトを開き、予告内容に該当する地域を表示させる。
「え？コナン君から連絡があったんですか！」
高木は電話の内容に驚き振り返る。佐藤と目が合い、頷き合って彼女の取るメモを見た。相手は毛利小五郎のようだ。
「ええ、今、目暮警部は席を外しています。代わりに私が伺います

が・・・」

佐藤の右手がサラサラと電話の内容を綴っていく。

「わかりました。コナン君が毛利さんにそう言ったんですね」

佐藤の手が止まり、眉間にシワが寄せられる。

「では誰が。・・・それって哀ちゃんっていうクールな女の子でしたよね」

佐藤は少しの間思案した。毛利の言う事を信用するか、大人顔負けの少女を信用するか。

「毛利さんすみません。彼女の言った言葉、そのまま教えてもらえますか？」

再び佐藤の右手が動き出す。高木はその内容を見て驚いた。先程の毛利が推理したものらしいメモと比べるとまるで違う。どうやったらここまで変換できるのかと、逆に関心した。佐藤も同意見なのだろう。毛利との会話を終わらせた後、どうにも微妙な表情だった。

「ねえ、高木君ならどう考える？」

「意地悪ですね」

佐藤のニヤリとした笑みに苦笑で答えた。

「さっきまでの僕なら、毛利さんの意見も可能性の一つとして受け止められたと思いますけど」

「言うじゃない。で、今は？」

佐藤の笑みが深くなる。

「今は・・・、やっぱりコナン君は暗号を完璧に解読していたんじゃないかと思います。そうすると哀ちゃんの言ってた事も別の解釈ができますし」

「そうよね。コナン君、よくキッドから預かったって宝石持ってくるものね」

「ええ。それで哀ちゃんの言葉を入れ替えて文章を組み立て直すと『キッドから預かった宝石を盗まれた。現在キッドに見つかって更に一緒に宝石を取り返そうとしている。宝石を取り返すまで帰らない』といったところでしょうか」

「さっすが私の部下、偉い！哀ちゃんの言った言葉の順序は、毛利さんも覚えていないそうよ。自分でも入れ替えたって言ってたし。問題は本当にコナン君が暗号を解読して第二の現場へ行ったか、よね。コナン君が何時に家を出たのか分かれば決定的なんだけどなぁ」

「それなら僕が阿笠さんに聞いてみますよ」

少年探偵団の相手をすることが多い高木は、その保護者役である阿笠と連絡を取る事も多い。高木は早速阿笠へ電話し外出時間を聞き出した。すると阿笠はコナンが出かける前に就寝したが、就寝したのがキッドの中継後であるという答えが返ってきた。哀にも話を聞きたかったが、子供たちと出かけてしまった後だった。

「これではっきりしたわね。コナン君は暗号を正確に読み解いていた。そして私たちの解読も間違っていない」

「それで佐藤さん、キッドとコナン君が会っていたと思われるビルですが、ココなんてどうでしょう」

高木は先程ネットで調べた地図を佐藤に示す。

「妥当ね。じゃあ目的地も決まった事だし、行くわよ」
「駅前ですねえ。車停める場所があればいいんですけど」
「そんなのファミレスかどっかに協力させればいいのよ」

佐藤は機嫌よく出かけようとしたが慌てて戻り、目暮の机の上に小五郎からの電話メモと、出かける旨のメモを置いた。

8.

佐藤と高木は第二現場を確認後、周囲の聞き込みを開始した。
結果としてはコナンらしき子供を見た人は何人か居り、朝9時過ぎと12時過ぎに見たというものばかりだった。ただ一人、コンビニの店主だけが昨夜11時半頃に店の前で20代後半くらいの男と話しているのを見ていた。話の内容は、夜遅いから送る、というものだったらしい。やはり、自分達の読みは正しかったのだ。問題はその後の消息。送ってもらったはずのコナンは、何故か家には帰らず、翌朝駅へ向かっている。そして12時過ぎにまたここに戻り、家に帰るわけでもなく、その後の足取りが掴めない。いつ宝石を盗まれたのかは分からないが、現在はキッドと行動しているはずだ。キッドは変装の名人。コナンも変装しているのかもしれない。そう思うと、コナンくらいの子供を連れた大人が全て怪しく見えてくる。だが、全員に聞いて回るわけにもいかない。
高木は二、三度頭を振り、気持ちを切り替えた。これから米花町までの最短コースを歩くのだ。きっとコナンもこの道を通っているだろう。何かの痕跡が残っているかもしれない。
駅前の混雑を抜け大通りを渡ると、住宅街に入る。そしてその道に沿うようにして細長い公園が続く。公園の向こうには大きなマンションが何棟かあり、子供たちの遊ぶ声が聞こえてきた。その子供たちの遊ぶ姿に高木は目を見張った。

「佐藤さん、あの子供たちのスケボー」
「似てるわね」

佐藤と高木は頷きあい、子供たちの所へ向かった。

「ねえ、君達、ちょっと教えて欲しいんだけど」

子供たちは立ち止まり、佐藤と高木を見上げた。不思議そうな顔、好奇心旺盛な顔、不審そうな顔と子供たちの様子は様々だ。佐藤はにっこり笑って警察官の証を示す。

「私たち警察なんだけど、そのスケボーどうしたの？」
「拾った。な」
「うん」
「ちょっと見せてくれるかな？」
「別にいいよ」

高木は子供たちからスケートボードを受け取った。通常のものよりもやや重く、裏返すとエンジンのようなものが付いていた。こんな加工を出きるのは阿笠くらいしか思いつかない。

「どう？」
「ええ、間違いないないと思います」
「ねえ、これどこにあったかわかる？」
「トイレの近くだよ」
「それってどこ？」
「あっち」

子供たちが一斉に指差した方向には、白っぽい四角い建物があった。あれがトイレなのだろう。佐藤と高木はこのスケートボードが事件に関係あるものだと子供たちに説明して譲り受けた。そして現場を調べる為、トイレへ向かう。

「争った形跡はないわね」
「そうですね。まわりの草も踏み荒らされているけど、公園内ですし、子供たちが遊んだ後では・・・」

「収穫なしか」
「それでも、ここで何かがあったことだけは確かですよ」

辺りはまだ明るいが太陽は傾いてきている。この季節は大分日が長い。時計を確認すると、時刻は17時半を回っていた。どおりで子供たちの声も聞こえないはずだ、と周囲を見渡せば、手を繋いだ年の離れた兄弟が一丁程離れた通りを住宅街の方から出てくるのが見えた。そのまま公園に入ってベンチに座り、兄が弟を引き寄せ、寄りかからせている。素直に見れば仲の良い兄弟だ。

「何故でしょう。何か気になるんですけど、あの兄弟」
「そうね。弟君がコナン君位だからかしらね」
「それもそうですけど、今この時間に外に出てくるというのもどうでしょう。そろそろ夕飯の時間になるだろうし」
「親に怒られて飛び出した弟を慰める兄とか？とにかくコナン君かどうかはここからじゃ分からないわ。移動しましょう」

佐藤と高木はスケートボードを持ち、二人に気が付かれないように移動した。なるべく兄弟から離れた道を選び一度通り越してから、弟の顔が見える位置へ隠れて確認する。

「眼鏡をしていないけど、コナン君に似ている気がするわ」

高木もじっと目を凝らす。帽子を被っているし、眼鏡もしていないが確かにコナンに似ている気がする。服装はやはり聞いていたのもと違うが、キッドが一緒にいるなら軽い変装ということで着替えさせられているかもしれない。でも、そう思うのは、コナンかもしれない、キッドがいるから、という先入観があるからなのか。

「声、掛けますか？」

「いえ、もう少し様子を見ましょう。あの二人顔も似てるし、本当に兄弟かもしれない」

9.

コナンと怪盗はファミレスでかなり長い時間を過ごし、再び渡辺の家へ向かって歩いていた。

「おーい。寝てもいいから、真っ直ぐ歩けよー」

「・・・んな器用なマネができるか・・・」

「じゃあ、抱っこするぞ」

「断る！」

帽子のツバに隠されて見えないが、コナンはきっと必死に目をこじ開けていて物凄い顔つきになっているんじゃないかと思うと、怪盗は思わず笑い声を上げそうになる。その雰囲気を感じたのだろう。コナンは擦りすぎた赤い目で怪盗を睨みあげた。怪盗は、まあまあ、と適当にいなし、目的の公園に到着すると、渡辺の自宅の玄関が見えるベンチを素早く割り出してコナンを座らせた。そして自分も隣に座りコナンを寄りかからせる。

「とりあえず玄関は見張っとくから、目を閉じておけ。加藤が来たら教える」

コナンは何も言わずに素直に頷いた。

ここへ来る時に渡辺の部屋が見える道を通り、偶然にもベランダに出ている人物を確認できた。現在時刻は１７時４７分。時間的に見ても渡辺本人であることは間違いない。

ふと、怪盗は自分達を見る視線に気が付いた。そっと盗み見ると、一度姿を拝借した事がある一課の刑事と女刑事が、こちらの、主にコナンの様子を伺っている。怪盗は小さく溜息をつくと、そっとコナンに声をかけた。

「名探偵、残念だけど一課の佐藤さんと高木さんに見つかっちまったみたいだぜ。どうする？」
「マジかよ。あと少しだっていうのに」

コナンは徐に帽子を取ると、怪盗のヒザにグリグリと顔を擦りつけ始めた。怪盗の目が半眼になる。

「あにやってんだよ。んな事したって可愛くねーぞ」
「俺がやんねーようなこと、やってんだよ。つか、おめーの所為だ、おめーが店で中途半端に寝かせるから、余計眠いんじゃねーか」
「はあ？俺の所為か？」
「おめーの所為だ、おめーの。だから後は頼んだよ。カイト兄ちゃん」

コンニャロ・・・・

怪盗は口には出さずに悪態をついた。頬の筋肉が引きつっている。確かにコナンに無口な弟役を振ったのは自分だ。だが、言い方が可愛くない。それに店で寝とけとは言ったが、その眠気は疲れと体調不良から来ているものだということを、いい加減理解して欲しい。怪盗が刑事達の動向に気を配りつつ玄関を見張っているとヒザの上から規則正しい寝息が聞こえてきた。ハッキリ言って自分も眠くなりそうだ。パサッと軽い音を立てて帽子が落ちた。完璧に寝入ってしまっている。怪盗はコナンを潰さない様に気をつけながら、腕を伸ばし帽子を拾い上げる。その時、加藤らしき人物を目の端に捕らえた。顔を上げて見てみると、ちょうど渡辺の部屋のドアが開かれて、加藤が室内に入るところだった。

行動開始だ。

さて、どうしてくれようこの男。普通に起こしても起きないのではなかろうか。とりあえず抱き上げて連れて行くことにする。あれ

だけ嫌がっていたのだから、ビックリして飛び起きるかもしれない。それから加藤が来た事を伝えれば眠気も吹っ飛ぶ事だろう。
怪盗はコナンの両脇に手を入れて抱き上げたが、残念な事に目を覚まさなかった。仕方が無い、と怪盗は立ち上がり、道々起こす事にした。

□　□　□

眠ってしまったらしい弟を抱き上げて立ち去った兄を見送った佐藤と高木は、先程まで彼らが座っていたベンチまでやってきた。

「なんか、本当に兄弟みたいでしたね」
「でも、穿った見方をすれば、出来すぎな気もするけど」
「芝居をしていると？」
「ええ・・・例えばコナン君ならヒザに顔を埋めるような甘え方は絶対にしなさそうじゃない？それに抱っこで移動したのも、その方が立ち去る理由になるからで本当は・・・」
「寝たフリですか？」
「かもね」
「僕は兄の方が気になりましたね。ボーっと空を眺めているようで、実は何かを見ていたような感じがして。立ち去る前には確実にあっちを見ていましたし」

高木がその方向を指差し、揃ってそちらを見る。見えたのは普通のマンションの廊下だ。そして、その廊下を歩いて来る者がいる。目を凝らしてよく見ると、先程の兄弟の兄の方だ。弟は歩いているのか塀が邪魔で見えない。兄はある部屋の前で立ち止まると、確実に佐藤と高木を見た。

「笑ってる？」

佐藤が溢した言葉に高木も同意する。それどころか目が合った気さえした。次の瞬間、兄は真っ白に包まれる。白いマントにスーツ、青いシャツ、赤いネクタイ。最後にシルクハットが頭に乗せられた。

「キッド！」

「行くわよ、高木君！」

佐藤と高木は走り出し、キッドが出現したマンションへ急いだ。

10.

怪盗は一瞬のうちに白い衣装を身に纏った。

「準備ＯＫか？名探偵」

「ああ、いつでもいいぜ」

作戦はこうだ。インターフォンを押し出てきた渡辺を怪盗が催眠ガスで眠らせる。そして加藤をコナンが麻酔針で仕留める。これなら五分とかからず終了するだろう。

怪盗がインターフォンを押すと、部屋の中から足音がし、鍵が回されドアが開いた。

「どちら様・・・」

「おじさん、昨日は送ってくれてありがとう。僕だよ、ほら」

コナンはそこで言葉を止め、眼鏡を掛ける。

「思い出してくれた？」

コナンは挑戦的な笑みを浮かべ、渡辺を見上げる。渡辺がドアを閉めようと力を込めると、白い手がそれを阻んだ。

「こんばんは、怪盗キッドです。本日は名探偵の助手として伺いました。身に覚えはありますよね」

怪盗は取り出した催眠スプレーを渡辺の顔めがけて噴射しようとしたところで手を払われた。スプレー缶がカラカラと転がる。

「そうだった。多分、空手の有段者だ」
「そう言う事は先に言ってください」

コナンとキッドが言葉を交わしている間にも、渡辺から突きや蹴りが繰り出される。怪盗は狭い場所でそれらをかわし、払いのけ渡辺の後ろに回りこんだ。渡辺は怪盗を追い後ろを振り向くと、ドアの陰に隠れていたコナンが渡辺の背後から麻酔針を射ち込んだ。針は狙い違わず、渡辺の首筋に突き刺さる。麻酔が効いて倒れこむ渡辺に怪盗も催眠スプレーを噴射して、やっと二人は安堵の息をついた。

「さて」

怪盗が真っ直ぐに立ち、例の部屋の方へ向き直る。そこにはスーツ姿の男が部屋の出入り口で腰を抜かしていた。コナンも室内に入り怪盗の隣に並ぶ。

「私達がここに来た理由はお分かりですね。逃げようとしてもムダです。直ぐに警察の方が来ますよ」

その言葉にコナンは携帯を取り出して操作する。

「名探偵、電話をする必要はないですよ。ほら、足音が聞こえるでしょ？」

確かに足音が響いていた。加藤はボソボソと、ウソだ、ハッタリだ、と呟いている。怪盗はカウントダウンを始めた。

「3・・・2・・・1・・・」

バタンッ！と勢い良くドアが開かれる。

「警察よ！今ここに、怪と・・・う・・・」

「こんばんは。佐藤刑事、高木刑事」

「コナン君！っていうか、これってどんな状況？」

佐藤の足元に家主である渡辺が倒れ、リビングに続く廊下の途中にコナンと怪盗が並んで立っており、手前の部屋の中を見ている。

「申し訳ありませんが、私は本日盗みに来たのではありません。あくまでもこの探偵君の助手です」

佐藤と高木は更に訳が分からないと首を傾げた。

「簡単に言うと、昨日僕がキッドから預かった宝石をそこに倒れている渡辺って人に盗られて、今日こっちの部屋に居る加藤って人に売ろうとしてたから、取り返しに来たんだ」

「刑事さん達、ちょっとこっちの部屋を見てもらえますか？盗品だらけです」

佐藤は高木にこの場に残るよう指示し部屋の中に入る。キッドに示された場所には、スチールラックに並べられたブランドバッグ等の数々、また中央に置かれたテーブルの上には、確かに昨夜キッドに盗られたビッグジュエルが置かれていた。佐藤は部屋の出入り口に座り込んでいる男を睨みつけると、その腕を取って手錠を嵌める。そして高木も渡辺の腕に手錠を嵌めた。

「終わったな。って大丈夫か？」

怪盗がコナンを振り返ると、コナンは壁に背中を預けズルズルと

座り込んでいるところだった。
「大丈夫。ただ、ちょっと気が抜けたっていうか、疲れたっていうか」
「そうだろうな。後は警察に任せて寝ちまえよ」
「バーロー。さっきまであんだけ寝てたんだぜ？寝られるわけねぇだろ」
コナンはそう言いつつも瞼が重そうだった。怪盗はコナンの眼鏡を外し、目元を白い手袋で覆った。
「いいから、いいから。ちゃんと家まで送ってやるって、刑事さん達が」
「何だよ、それ。無責任だな・・・」
コナンが静かになり、怪盗がその手を退かす。
「寝ちゃいましたね」
「本当に寝ちゃったんですか？」
「ええ、寝てるわ」
怪盗はコナンをそっと横抱きに抱え、高木に渡した。
「そういう訳で、探偵君をお願いします」
「えっ？ちょ、ちょっと」
そして真っ直ぐ玄関へ向かって歩き出す。
「あ、そうそう。これを忘れていました」

怪盗は振り向くと、直ぐ後ろまで来ていた佐藤にリュックと風邪薬を手渡した。

「探偵君の着替えと風邪薬です。それから左肩に殴られた痕がありますから気をつけてあげてください。それでは」

今度こそ怪盗はドアの外へ姿を消した。

我に返った佐藤が直ぐに追いかけたが、既にその姿は無かった。

11.

翌朝、コナンは小五郎に文字通り叩き起こされた。そしてそのまま説教に突入である。小五郎の怒りも最もなので、コナンは正座をして大人しく聞いていたが、小五郎の怒鳴り声こ聞きつけた蘭が割り込んできて途中で終了となった。小五郎は握った拳の行き場をなくしイラついていたが「朝飯食ったら警視庁に行くぞ」と言葉を残して部屋を出て行った。

コナンは、そうだよなあ、と乾いた笑みを溢す。深夜の外出に外泊、そして音信不通だけなら、ちょっとした行方不明だが、暴行・窃盗被害に怪盗同伴で家宅侵入、挙句窃盗犯を暴いたとなれば、警察も事情を聞かない訳にはいかないだろう。まあ、家宅侵入については見つかってないのだし、わざわざ言うつもりも無いが。

コナンは着替えようと無造作に服を脱いだ。何故か昨日キッドに着せられた服で寝ていたのである。多分、起こさないようにとの配慮だとは思うが、そうなると昨夜の自分がどうやって帰宅したのかが気になる。寝ぼけながらも自分の足で帰宅したか、それとも寝たまま運ばれたのか。出来れば前者希望だが、恐らく後者なのだろう。

コナンは溜息を付きつつ、裏返った服を直そうとしてある一点に目が留まった。

さくら3くみ　くろばかいと

見間違いかと思い、品質表示に書かれた文字を一字ずつ確認するが、間違いではなかった。

「マジかよ」

思わずボソッと口をついたが、その驚きは半端ではない。流石の

怪盗もここまでは気付かなかったのだろう。
　という事は、つまり、・・・そういうことだ。

「コナン、いつまで何やってる。メシだぞ」
「はーい」

　リビングから聞こえた小五郎の声に返事をし、急いで着替える。そして小五郎の机の上からはさみを拝借して、怪盗のお下がりから品質表示を切り取った。
　その後出かけた警視庁で、思いのほか心配していたらしい目暮に抱き締められたり、怪盗の事を聞きたくてウズウズしている佐藤たちから逃げ回ったりした。
　渡辺については、あの辺一帯で起きている引ったくり犯で、相手を気絶させてから犯行に及ぶため、犯人の顔をはっきり見ているものがおらず、手をこまねいている状態のところ、今回の逮捕となったという事だった。更に取引現場を押さえたことから、販売ルートも明るみに出て、二課はこれから忙しくなるらしい。この逮捕劇に怪盗が協力していると中森に報告されれば、きっと一騒動起きることだろう。

□　□　□

その日の夜、コナンは体のダルさを感じ早めに就寝した。そして夜中に人の気配で目を覚ます。起き上がって小五郎のベッドを見たが空だった。きっと飲みに出かけているのだろう。その代わりにベッドの向こう、窓の外に見知った影がある。その影は勝手に窓を開けて室内に入ってきた。数秒目が合うと、その影、怪盗は盛大な溜息を付いて言った。

「言わんこっちゃない」
「何がだよ」
「それ」

と、怪盗は自分の額をトントンと指で叩いた。つられてコナンも自分の額に手をやればモコモコとした感触。いつの間にか冷却シートを貼られていたようだ。

「マジ？」
「気付いてなかったのか？鈍いなあ」
「ウッセー。何しに来たんだよ」
「昨日の今日でどんな具合かと思ってな」
「なんだ、見舞いか」
「とりあえず、元気そうで何より」
「この状況でそれを言うか？嫌味かよ」
「いやいや。昨日は結構グッタリしてたからな。無理やりでも帰せばよかったと思ってたんだよ」

怪盗は布団の脇に座り、タオルケットを捲って、『ここ』というように布団を叩いた。コナンは何の躊躇いもなくそれに従い横になる。そして怪盗が掛けてくれたタオルケットを口元まで引き上げた。

「昨日は悪かったな。その・・・迷惑かけて」

昨日は本当に怪盗に甘えていたと思う。今考えると恥ずかしいくらいだ。

「ああ、そうだ。あの服・・・」

「お前にやるよ。俺のお下がりが嫌じゃなければ」

「別に嫌じゃねぇよ」

やはり怪盗の正体は『くろばかいと』。あの顔が本物なのか、若い時のものか、または全く別のものなのかは定かではないが、調べて見つけ出せば面白い顔が見られそうだ。

「あんま無茶ばっか、すんじゃねえぞ。お前、ナリだけは小せぇガキなんだからよ」

「お前もか」

コナンはウンザリした顔をして軽く怪盗を睨んだ。今日、警視庁で会った人皆に言われた言葉だ。

「分かってるよ。理解してる。ただ事件が目の前に転がってきたら、忘れるだけだ」

「ほお。俺には小さくて目立たないのをいい事に、ちょこまかと動き回っているように見えるんだがな」

「言うほど楽じゃねぇんだぞ」

「肯定してんじゃねぇよ」

コナンはあらぬ方向へ目線を逸らす。そんなコナンの姿に怪盗は苦笑して立ち上がった。

「じゃあな。さっさと治せよ、名探偵。夏風邪はバカが引くもんだ

ぜ」
「一言余計だ！」
コナンは飛び起きて抗議したが、既に怪盗の姿はそこに無かった。
「礼くらい言わせろよ。バーロー」
コナンはボソリと呟き、『くろばかいと』を見つける決意を固めた。

１１．（後書き）

長い間、お付き合いくださり、ありがとうございます。
これにてこのお話は終了です。

この話、本当は６月中にはほとんど出来てたんですよねぇ。
敗因は手書きでした。ｏｒｚ
私がＰＣに向かってると子供達が寝ないし、壊れかけのｍｙＰＣは起動にとても時間がかかり合間に活動するのも難しく、仕方なくノートにちまちま書いてたんですが。
まさかＰＣに入力するのにあんなに時間が掛かるなんて。。。
しかも旦那と見ていたマクロスフロンティアに見ハマり、気がつけば有人とシェリルを追いかけてました。（さっさと入力しろよ）
もう期限を決めなきゃ冬になってしまう！と危機感を抱き、何とか自分の決めた期限に間に合った次第です。

もう、全文手書きは止めます。

それはさて置き。

今回は思いっきりタイトル負けしました。
もともとタイトルを考えるのは苦手なんですが、投げやりに大雑把なタイトルにするものではありませんね。壮大すぎて内容が伴ってませんよ、まったく。
話もどんどん大袈裟になってくるし、出る予定のなかった佐藤さんと高木さんは出てくるし。本当は５話前後で終わる予定だったんだけどなあ。（遠い目）
しかもオチが中途半端でごめんなさい。っていうか、書いてる途中

でオチが行方不明になりました！見切り発車はいけないなあ、と痛感した今回のお話でした。

と、まあ、いろいろありましたが、私としては楽しく書けたことには間違いありません。
皆様、いかがだったでしょうか。
ご感想等ありましたら、是非お寄せください。
ドキドキしながらお待ちしております。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

２０１１０７３１

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0851v/

コドモの事情

2011年9月13日00時25分発行